

令和 5 年 5 月 23 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00028

研究課題名（和文）近現代フランス倫理想に基づく「自己愛」概念の包括的研究

研究課題名（英文）Research on the idea of "Self-love" in the modern and contemporary French philosophy

研究代表者

村松 正隆（Muramatsu, Masataka）

北海道大学・文学研究院・教授

研究者番号：70348168

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究においては、フランス近現代思想史における「自己愛」概念の位相を明らかにすることを旨とした。フランス思想においては、パスカルやマルブランシュ以降、様々な「自己愛」の概念があるが、これは特に、20世紀前半になって新たに脚光をあびたと言える。本研究はこうした状況の中、特に、ルイ・ラヴェルが「自己愛」に厳しい批判を向けつつ同時にその「善用」の方向性を示したこと、ジャンケレヴィッチが「自己愛」に対してこれを徹底的に批判し新たな倫理の方向性を示したことを明らかにした。また、ミシェル・アンリについても、「自己」にこだわるアンリの思想のうちこそ、逆に「自己愛」を乗り越える契機があることを論じた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の社会的意義としては、様々な場面で各人が、「自己」を演出することを強いられている現状を反省的に捉え、こうした「自己」演出の背景にある「自己愛」を相対化するためには何が求められるのかを明らかにした点が挙げられる。私たちは「自己」と付き合い、ある意味で「自己愛」を持たずにはいられないわけだが、これが病的にならないための方向性をこの研究は明らかにしたといえる。また、ミシェル・アンリの哲学が示すように、「自己」への沈潜が、翻って「自己愛」を逃れる道でもありうる点、並びに、この発想を現在脚光を浴びつつある「精神的修練」の概念に結び付けうる点を示したことが、本研究の意義と言える。

研究成果の概要（英文）：In this research, we focus on the status of self-love in modern French philosophy, especially in the work of Louis Lavelle and Vladimir Jankelevitch. In order to understand their critiques against self-love, we analyse their respective conceptions of consciousness and their ontologies, insofar as both of these points enabled the two authors to severely criticize the notion of self-love.

We also analyse the novels of Michel Henry in order to get a better grasp on his philosophy. Doing so will allow us to understand possible relationships between philosophy and literature.

研究分野：哲学

キーワード：自己愛 ルイ・ラヴェル 精神的修練 ミシェル・アンリ 小説

1. 研究開始当初の背景

「自己愛」という概念を巡っては、当然ながら様々な学問的議論がなされてきた。また、SNSなどの興隆により、「自己」を他者に対して提示する場面が増加した結果、「自己愛」の病理が語られることも増えていたと言える。もっとも、哲学・倫理学の領域においては、必ずしも「自己愛」の概念が主題的に取り上げられることはなかった。「自己愛」が、哲学や倫理学が求める正確な「自己認識」の障害になりうることを考えれば、これは改善されるべき状況にあったと言える。

ここで目をフランス哲学の歴史に転じると、フランス哲学(文学)の領域においては、「自己愛」は比較的その問題点が論じられてきたと言える。特に、17世紀の古典期においては、この傾向はかなり強くみられる。具体的に名前を挙げるなら、ラ・ロシュフーコーは『箴言』において、人間の行動を支配する原理、あるいはその動機としての「自己愛」の根深さを淡々とした筆致で描き出した。また、パスカルは後に『パンセ』としてまとめられる一連の断章のかなりの部分で、人間の「自己中心性」を批判的に明らかにしたわけである。これらのテキストは、現代においても、読み手に対して優れた自己省察の機会を提供するものと言えるだろう。

また、20世紀においても、戦争の惨禍を背景として、言葉として「自己愛」という語を用いるわけではないが、例えばレヴィナスは人間の「自己中心性」を厳しく批判し、これを乗り越える契機を、よく知られるように、「他者」との関係のうちに探ろうとした。ところで、こうした、人間の自己中心性を批判的に描き出す20世紀フランスの思想家としては、他に、ルイ・ラヴェル(Louis Lavelle, 1883-1951)やジャンケレヴィッチ(Vladimir Jankélévitch, 1903-1985)などの名を挙げることができるだろう。彼らの思想のうちには、人間の自己中心性を批判的に吟味する存在論、倫理を見出すことができる。

しかしながら、研究開始当初においては、これらの哲学者に対する理解は十分であるとはいえない状況にあった。後者のジャンケレヴィッチについては、ある程度翻訳も揃っており、その思想についてもある程度の紹介がなされていたが、「自己愛」の概念に焦点をあてたものではなかった。前者のラヴェルに至っては、翻訳もなく、ほとんど紹介される論文もない状況にあった。こうした中で、彼らの「自己愛」批判の意義を明らかにすることには、思想的にも実践的にも意味のある状況にあったと言える。

2. 研究の目的

「自己愛」の問題が引き起こす論点は、ある程度は出そろっていると言える。すなわち、私たちは自己をどの程度愛することが許されるのか、誤解を恐れずに言えば、真の意味で良き生を送るには、どの程度の「自己愛」が許されるのかといったこと、これを明らかにすることが有効なのである。さらに進めて言えば、むき出しの「自己愛」の暴力性を明らかにし、これが他者のみならず自己自身をも損なうことを明らかにした上で、「自己」が尊重されるならばそれはどのような点で尊重されるべきか、また、そうした認識を可能とするべき存在論的枠組みはいかなるものなのか、これが明らかにされねばならないのである。こうした諸点を明らかにすることが、本研究の目的であった。

そのために本研究では、ルイ・ラヴェルやジャンケレヴィッチの哲学に着目し、彼らの哲学において「自己愛」がどのような意味で批判され、あるいはどのような点で肯定されるのか、これを明らかにすることを目指したのであった。特に重要であったのは「自己愛」の根底にあるともいえる、「意識」の概念の内実や、「自己」の位置の記述を可能とする存在論的な枠組みの解明であった。彼らの著作の読解を通して、これらの概念の解明と連絡を明らかにすることが本研究の目的となった。

また、中途より、20世紀後半の代表的な哲学者であり、「自己」の存在に徹底的にこだわったミシェル・アンリ(Michel Henry, 1922-2022)について、彼の「自己」、あるいは「自己愛」を巡る思索が、その小説にどのように反映しているのかを明らかにする作業にも取り組んだ。これによって、「自己」を巡る哲学的記述と文学的記述との関係を探ることも、本研究の目的の一つとなった。

3. 研究の方法

実質的には、ルイ・ラヴェル、ジャンケレヴィッチ、ミシェル・アンリのテキストを、関連文献も参照しつつ読解していくという古典的な手法をとった。必ずしも十全に生かすことはできなかったが、ラヴェルやジャンケレヴィッチのテキストの読解に際しては、現代の心理学における「自己愛」研究なども参考にするように試みた。また、ミシェル・アンリの読解に際しては、1960年代~70年代のフランス史研究や、アンリが参照したと思しき文学作品の読解をも同時に行うようにした。

4. 研究成果

主たる研究対象であるルイ・ラヴェルの哲学については、その存在論から導き出される言語の倫理を明らかにする作業を行い、これを論考としてまとめた。その成果は、"La Participation lavellienne a-t-elle une signification actuelle ?"（「ラベルの「参与」は、現代的意味を持つか？」と題された論考にまとめられ、第 38 回 ASPLF（フランス語圏哲学連合）大会において発表された（2021 年 6 月 10 日、Zoom）。この論考の中では、ラヴェルの存在論と言語の関りを明らかにし、特に、「働き（Acte）」の概念が、そのまま一種主体に対する「呼びかけ」の概念と結びつくことを論じた上で、我々が持つべき態度としての「沈黙」の重要性を分析した。また、ラヴェルが強調する、他者との言語的交流の条件としての「霊的な空間」といった概念の意味と、その思想史的意義を論じた。ラヴェルによれば、私たちは通常の社会的なコミュニケーションにおける言語に捉われることなく（こうした言語使用においては、私たちは常に、自己愛によって自己を飾り立てることへと駆り立てられるから）、自己の内面のうちに立ち戻り、「働き」の声に耳を傾ける中でこそ、逆説的に、他者との真のコミュニケーションの可能性が開けるのである。これらはいずれも、この研究の主たるテーマである「自己愛」の分析とそこから離脱を可能にする技法を巡ってなされた論考である。

また彼の「悪論」に焦点を当てて、苦痛や悪を契機とし、これを自らの一種の精神的鍛錬の機会とし、こうした否定的経験を自らの形而上学と重ね合わせるラヴェルの悪論の特質について研究を進めた。その成果の一部は、2019 年 10 月に山口大学で行われた日本倫理学会の一般研究にて発表した。特に、苦痛をば自らの有限性を自覚する契機としつつ、そうした思考の果てに、有限なもの同士の共同体、ならびに精神的交流の可能性を指摘するラヴェルの議論は、彼の言う「精神的空間(espace spirituelle)」と呼応するものであることを示唆した。

また、ジャンケレヴィッチについては、『やましい意識』(La Mauvaise Conscience) の読解を進め、ジャンケレヴィッチの「意識」の分析が徹頭徹尾「自己愛」の批判に貫かれており、一種その意味で「袋小路」に人間を追い込むようなところがありながら、そうした批判的吟味の中でこそ真の意味での人間性が確保されるとの発想に導かれているとの理解を得た（ただし、これについては論文・口頭発表には至っていない）。

ミシェル・アンリの小説については、彼の初期作品『若き士官』において、「悪」と「生」が重ねられていること、ならびにこの重ね合わせにおいて、「自己愛」が一種の鍵概念となることを明らかにし、また、上記のミシェル・アンリ的小説において、「悪」が、存在者の存在の条件とされているのではないかと、という解釈を提出した。また、ミシェル・アンリ的小説一般についても、「自己性」や「悪」との関わりの中で分析を行った。また、『目を閉じて、愛』や『王の息子』の読解にも取り組み、人間の「自己愛」を増大させる文化的諸装置に対して、アンリ的な主観性がどのように抵抗しうるのか、その可能性を探る試みとして、これらの小説の意義を明らかにした。こうした一連のミシェル・アンリ研究の成果は『ミシェル・アンリ読本』（法政大学出版局、2022 年）に結実している。

そのほか、本研究に関連する付随的成果が以下のようにある。

1) 「自己愛」概念については、この解毒剤として機能するイロニーの概念に着目し、特に、「イロニー」を新たに「反語」として引き受け、「反語的精神」を賞揚した林達夫の姿勢を日本独自のものとして捉え、かつ、彼に影響を与えたジャンケレヴィッチのイロニー論との対比の中で、林達夫の「反語的精神」の歴史的意義を論じた。即ち彼の反語的精神とは、言論を抑圧する社会状況における生存のための術策であると同時に、彼自身が明言するように、彼の生き方の原則であること、またその背後には、一種美的な発想があり、即ち、芸術的とは現実と理念との対立、矛盾をあるがままに表現しようとする、という林達夫の芸術観が、林達夫の反語論の背景にあること、また、ジャンケレヴィッチのイロニー論が一定の影響を与えていることを明らかにした。その成果の一部は、パリ第 10 大学教授 Thierry Hoquet 氏が主宰したコローク「日本哲学の諸概念」において発表した（2019 年 11 月）。

2) 2020 年 10 月 30 日に Zoom を利用して開催された哲学会ワークショップ「19 世紀フランス哲学再考 反省哲学の系譜から」においては、川口茂雄氏（甲南大学）と共に登壇し、「19 世紀フランスにおけるスピノザの影 ~ラニョーの神論を巡って」と題した発表を行った。この発表においては、スピノザの影響下での「自己愛」の滅却に関するラニョーの思考を紹介・分析した。これによって、19 世紀末のフランス哲学における「自己愛」の克服のあり方を巡る議論の一端を明らかにした。

3) なお、一般向けの教科書である『よくわかる哲学・思想』（ミネルヴァ書房）に、項目「ル

ソー」を執筆したが、そこではルソーにおける「自己愛」の意義に焦点を当てており、これも本研究の実績である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Masataka MURAMATSU	4. 巻 1
2. 論文標題 La Participation lavellienne a-t-elle une signification actuelle?	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ASPLF;La Participatio;Recueil des communications	6. 最初と最後の頁 pp. 156-166
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村松 正隆	4. 巻 9
2. 論文標題 『若き士官』における 悪 の諸形象	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ミシェル・アンリ研究	6. 最初と最後の頁 25-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20678/henrykenkyu.9.0_25	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 村松 正隆	4. 巻 8
2. 論文標題 ミシェル・アンリの小説世界	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ミシェル・アンリ研究	6. 最初と最後の頁 pp.1-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20678/henrykenkyu.8.0_1	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 村松 正隆	4. 巻 12
2. 論文標題 失敗した政治小説か？ 死者との交流の可能性を探る小説か？ アンリ最後の小説『不寐な死体』を読む	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ミシェル・アンリ研究	6. 最初と最後の頁 31-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20678/henrykenkyu.12.0_31	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 村松 正隆	4. 巻 50 (10)
2. 論文標題 小説のつくり方、哲学のつくり方 –ミシェル・アンリの場合	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 149-156
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Masataka MURAMATSU	4. 巻 20(1)
2. 論文標題 Adam Smith au Japon	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Revue de Philosophie economique	6. 最初と最後の頁 137-157
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 5件)

1. 発表者名 Masataka MURAMATSU
2. 発表標題 La Participation lavellienne a-t-elle une signification actuelle?
3. 学会等名 8E CONGRES DE L'ASPLF 2020 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 村松正隆
2. 発表標題 19世紀フランスにおけるスピノザの影 – ラニョーの神論を巡って
3. 学会等名 哲学会第59回研究発表大会 ワークショップ「19世紀フランス哲学再考 反省哲学の系譜から」(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 村松正隆
2. 発表標題 アンリ・象徴・精神医療 『王の息子』を読む
3. 学会等名 日本ミシェル・アンリ哲学会第十二回研究大会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 村松 正隆
2. 発表標題 「痛み」と「苦しみ」の意義 ルイ・ラヴェルにおける倫理学と存在論の結節点として
3. 学会等名 日本倫理学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Masataka MURAMATSU
2. 発表標題 Hango (反語) ; l'ironie selon HAYASHI Tatsuo (林達夫 1896-1984).
3. 学会等名 Les concepts de la philosophie japonaise (Colloque internationale) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 村松 正隆
2. 発表標題 『若き士官』における 悪 の諸形象
3. 学会等名 日本ミシェル・アンリ学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Masataka Muramatsu
2. 発表標題 The Spirit of Irony, the style of Hayashi Tatsuo
3. 学会等名 20th Hokkaido University - Seoul National University JOINT SYMPOSIUM (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Masataka Muramatsu
2. 発表標題 Quel est l'esprit de l'ironie ? Tatsuo Hayashi et la pensee japonaise d'apres-guerre
3. 学会等名 Groupe d'etude de philosophie japonaise (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 村松正隆
2. 発表標題 「アンリ最後の小説『不寐な死体』を読む」
3. 学会等名 日本ミシェル・アンリ哲学会第十四回研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 村松正隆
2. 発表標題 『目を閉じて、愛』を読む
3. 学会等名 日本ミシェル・アンリ哲学会第十三回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Masataka Muramatsu
2. 発表標題 The Idea of Irony in Japan in the 1940s Looking at a Possible Opposition between Hayashi Tatsuo and Yasuda Yojuro
3. 学会等名 5th Conference of the ENOJP (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 納富 信留、檜垣 立哉、柏端 達也、村松 正隆、他24名	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 232
3. 書名 よくわかる哲学・思想	

1. 著者名 川瀬雅也、米虫正巳、伊原木大祐、村松正隆、他30名	4. 発行年 2022年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 323
3. 書名 ミシェル・アンリ読本	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------